

20世紀アメリカ文学における「電気照明」表象についての研究 ——アーネスト・ヘミングウェイを中心に

戸田 慧 専任講師 (TODA, KEI 人文学部・国際英語学科)

『日はまた昇る』の文豪ヘミングウェイは 電気エネルギーの放つ輝きに何を見たのか

戸田慧研究室では、20世紀アメリカ文学を代表する作家アーネスト・ヘミングウェイ(1899~1961)の作品における「電気照明」の表象(ひょうしょう)を分析し、19世紀から20世紀への歴史の転換期を象徴する新興エネルギーとしての「電気照明」を、ヘミングウェイがどのように表現したのかという問題点について、特に宗教観や価値観の変遷と比較した研究を実施しています。



する反応は、好意的とは言えないものが主流であったようです。ヘンリー・ジェイムズ、エドガー・アラン・ポーなどのアメリカ人作家は、電灯の強烈な光を〈趣(おもむき)のない不健全な光〉として忌避しています。

その一方で、ヘミングウェイは、短編小説「清潔で、とても明るいところ」の中で、電灯に照らされたカフェを、死の恐怖にさいなまれる老人を守る〈聖域〉のような場所として物語っています。

19世紀末に発明された電気照明は、従来のロウソクやランプよりも安全で清潔な照明として、またたく間に欧米全土に普及しました。1889年のパリ万博では、電気照明で彩られた「電気宮」や、サーチライトを搭載したエッフェル塔が建設されています。電気照明は、20世紀の到来を、文字通り輝かしく告げる発明でもありました。

ただし、こうした時期における市民や芸術家の電気照明に対

電気照明の歴史的価値や位置づけについては、歴史学研究の分野において詳しく考察されています。しかしながら、電気が新興エネルギーとして普及し始めた当時の欧米において、電気照明が文学作品の中でどのように描かれたのかということについて、特に宗教観を始めとした人々の価値観の変化との関連性に着目して論じることは、日本でも海外でも、これまで一度も行われて来ませんでした。

受託研究のススメ

戸田研究室では、企業の皆様とコラボした研究活動として、例えば次のようなご要望にお応えすることができます。まずはご相談ください。



「電気エネルギーの特色を従来とは異なる観点からとらえ直した社会普及活動に取り組みたい。」

「ヘミングウェイ作品の愛読者が多い団塊世代の顧客の感性にうったえるような、電化製品のある空間をプロデュースしたい。」

「人文学分野と融合した研究開発により、従来の視点とは異なる独創性にあふれた技術開発に挑戦したい。」

人文学の視点から電気工学を〈読む〉ことで、電気の光が照らし出す
対象の〈神秘性〉や〈英雄性〉が見えてくる